
トレジャーハンター

rain

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トレジャーハンター

【Nコード】

N2518U

【作者名】

rain

【あらすじ】

初代トレジャーハンターが世界最古の古文書を発見したことがきっかけとなり、世界で唯一の国である三大大国が、この世界に封印されたとされる神の3つの力を手中におさめるべく、トレジャーハンターを国家機関とし、古代人（この世界をつくったとされる4つの民）の謎に迫るべく動いていた。トレジャーハンターの主人公は、神の力に興味をもっていなかったが、国の依頼や任務をこなしていくうちに、封印された神の力や、もうひとつの謎とされてきた空の民の謎に迫っていく物語です。

ブログ 世界の神話（前書き）

どうも初めて小説を投稿させていただくRainと申します。

小説を書くことは初めてだし、小説を書くためにまったく勉強などしていません。

まったくの素人です。本当に個人的な趣味として書かせていただいています。

この小説のプロットなどはあまり考えていません（考えるより行動する派なので；

それでも大丈夫な方のみお読みください。

もし読んでくださったなら、小説を書くにあたってのアドバイスや内容にたいするアドバイスなど書いてくれたらありがたいです。

プロローグ 世界の神話

これはこの世界に語り継がれる神話の一節である。

久遠の昔神は一つの世界をつくった

そして自らと同じ生命4人つくりだし

それぞれに自らの力を与えた

神はそれらに後の世界を任せ4人を自らがつくった世界に送り込んだ
そこは真つ白で何も無い世界だった

一人はこの世界の心臓をつくった

一人は広大な大地をつくった

一人は命の源となる海をつくった

一人は天に果てしなく続く空をつくった

そうして月日は流れた

4人がつくった世界は様々な生命が暮らす豊かな世界となった

四人はそれぞれ自らと同じ生命をつくった

それらはそれぞれ

大地の民 海の民 地底の民 空の民

と名乗りそれぞれ別れて暮らすようになった

しかし別れて暮らすうちに

自分たちの生活をもつと豊かにしたいと考えるようになった

豊かにするには他の民の土地が必要だと考えるようになった

やがて他の民の土地を奪い合うようになった

そうして争いが起きるようになり

大地の民 海の民 地底の民で争うようになった

3つの大きな力はぶつかり合い

海は荒れ マグマが噴火し 大地は切り裂かれ
世界が壊れ始めた

その光景をみていた空の民は

神に救いを求めた

神は3つの荒尾っている民から

自ら分け与えた力を奪い

陸でしか生きられないようにした

そして3つの力を空の民にあたえ

空の民が世界をつくるように告げた

しかし3つの力は強大で

空の民には制御することができなかった

空の民は3つの力に命を与え

荒廃した世界を元に戻すよう命じた

3つの力はこの世界の元となる力をつくりだし
命を与え世界を再生するために使役した

そうして世界は元の姿に戻っていった

力を失った3つの民は深く反省し

空の民に神に力を返してもらえるよう

神と交渉するように頼んだ

しかし空の民はそれを拒んだ

3つの民は怒り

空の民を裏切り者と称し暴動をおこした

それをみた空の民は

神から授かった3つの力を封印し

3つの力がつくりだした世界の源となる力に

この世界を守るよう告げ

忽然と姿を消した

この神話が描かれた世界最古の古文書は

初代トレジャーハンター ジョン・フラベルによって発見された

この発見によりトレジャーハンターの存在が重要視され

やがては国の国家機関となる

ノエル様ことノエル・キニアス 彼はこの世界では有名なトレジャーハンター

Aクラスのトレジャーハンターでトレジャーハンターとして優秀なだけでなく、ルックスも抜群

ノエルの写真集がださたりファンクラブが立ち上がるほどだ。

実力もトレジャーハンター最高位のSクラスの実力を持っているという噂もある

・・・という理由で国民の人気が高い、特に女性に

「セリナ！もうそろそろ時間よ。降りてらっしゃい」

一階からお母さんの声がする

その声でセリナははっと我に返った

いけないもうこんな時間だ！！

セリナは急いで階段を下り、玄関に直行する

玄関ではもうお母さんが出発の準備をしてくれていた

「気を付けてね。」

「いつてきますっ！！」

心配そうなお母さんの顔を見ながら元気に返事をし

セリナは家を出て行った

「体には気を付けるのよ」

お母さんの声に驚き後ろを振り返る

家の外まで出てきてくれたらしい

これからしばらく会えなくなるな

少し寂しいと思う気持ちを抑え

「お母さんこそ体に気を付けてね」

心配させないために元気よく手を振り
家をあとにした

そんな幸せな日の朝のひと時とは一転し
午後から地獄に変わることになる

「きやあああー！ー！ー！！」
森の中で一人の悲鳴が響き渡る

「せんばー！ーい、助けてくださーい」
セリナが逃げている後ろからウルフフアングという
狼に似た魔獣が6匹ほど追いかけてきている

「ぎゃーぎゃーうるせえ、たったの6匹だろ？ほら頑張れ、頑張れ」
セリナは声のしたほうを見上げる
そこには安全地帯である木の上でだるそうに
手を叩きながら見下ろしているノエルがいた

「ウルフフアング6匹なんて、一人では無理ですよっ！ー！」
襲い掛かってくるウルフフアングを次々にかわしながら
ノエルに助けを求める

「無理じゃねえ、無理なもんでも気合だ、気合。それに10匹のうち
4匹も倒したんだろ？」
「たったの4匹ですっ！6匹なんて無茶ですよ！！実践はまだ初めて
なのに・・・」

ノエルに抗議している最中にウルフファンクが2匹束になって飛び上がり

セリナに襲い掛かってきた

「ひいっ！」

悲鳴を上げながらも、杖と槍がひとつになったセレナの武器ランスロッドの槍の部分で2匹を一刀両断する
しかしまだ4匹セリナの周りで円を描きながら襲い掛かるタイミングを図っている

ここまでの戦いでセリナはすでに相当体力を使っておりウルフファンク4匹を相手にする体力は残っていない

これはマズイ。次襲い掛かられたら終わりだ
命の危機を感じ、助けを求めようと

ノエルの方を見上げたら、怒りを通り越し落胆した

「ちょっと何寝てるんですか！せんぱーい」

そんなセリナの悲痛の叫びも届かず

ノエルは気持ちよさそうに木の枝に横になって眠っている

こんなに大声で叫んでも聞いてないし・・・

もうだめだと思ったとき

残りの4匹のウルフファンクがいつせいにセリナに襲い掛かってきた

「きゃあああああー」

もう何度目かもわからない悲鳴が森の中に響き渡った

第二話 男の子の依頼（前書き）

1話書いた後に、自分の書いた小説を読んでもみると、すごく短かった。2話は文字数を大幅に増やしてみました。1話書いたときは結構書いたつもりだったんですけど、いざ見てみるとあまりの短さにびっくりしました。本当にごめんなさい。

第二話 男の子の依頼

港町レスカ

「どうして助けられなかったんですかっ!!」

セリナの怒号がカフェの店内に響き渡る

怒号を向けられた本人、ノエルは眉間にしわを寄せ

不機嫌そうにしながらも、もくもくと昼ごはんを食べている

全く相手にされていないセリナはより一層大声で怒鳴った

「見てください!この全身傷だらけの体!!」

本人が言うように、セリナの顔は絆創膏だらけ足や腕は包帯だらけである。

どうしてこんな傷だらけになったかというと

不幸の始まりはセリナが訓練生として一歩踏み出したところから始まる……

午前9:00

待ち合わせの場所はここであつてるよなあ……?

待ち合わせ場所に指定されたこの町に唯一、一つだけある噴水の前でノエルを待ちながら思う。

普通訓練生と監督官(トレジャーハンターAクラス)が会うときはハンターの拠点となるハンターハウスとよばれるトレジャーハンターしか利用することのできない施設で会うことが一般的である。

しかしノエルの場合、なぜか噴水の前で待ち合わせということになっている。

ハンターハウスに行くこともできないほど忙しいってことなのかな？とセリナがあれこれ考えていると

トレジャーハンターの制服を着てフードを目深にかぶり、大剣を背負った男がこちらに近づいてきた。

「お前がセリナ・ロワールか？」

「はい、そうですけど・・・」

「俺がお前の監督官を担当するノエルだ。これから・・・」

「あなたがあのノエル様ですかっ？」

この男がノエルと聞いた瞬間、セリナは興奮し大声をあげた。

「馬鹿っ！！声が大きいっ！何のためにフード被ってるとおもってるんだっ！！」

セリナははっとして思わず口を手を当てたが、時すでに遅く・・・

「今、あの子ノエルって言わなかった？」

「えっ、あの有名なトレジャーハンターの？」

「顔が隠れててよく見えないんだけど・・・」

セリナとノエルの周りにはすでに多くのギャラリーが集まっていた。

「ちっ、気づかれたか・・・。行くぞ！」

「はっ・・・はい！！」

セリナに声をかけるなりノエルはギャラリーが集まって道をふさい

でいるほうと反対方向に駆け出した。

セリナは慌ててノエルを追う。

セリナが全力疾走すること1時間
ようやく町を出ることができた。

「ハア、ハア、・・・ごめんなさい、ノエル様・・・。本物に会えて嬉しくって、つい大きな声をだしました・・・。」

「もういい、とりあえずその“ノエル様”っていう呼び方はやめろ！」

「では、何て呼べば・・・？」

「ノエル様以外ならなんでもいい。」

「それじゃあ、ノエル先輩って呼んでいいですか？」

「・・・好きにしろ。」

そう言いながら、被っていたフードを脱ぎ歩き出す。

わぁ、かつこいい・・・！！

写真集なんかで見るより全然かつこいい！！やっぱり生はちがうなあ。

セリナがボーっとしながらついていくと

いきなりノエルが歩みを止めた。

「ノエル先輩、どうしたんですか？」

「お前の訓練生としての最初の訓練だ、この森に棲みついているウルフアングを倒してもらう。」

「えっ！！ウルフアングをですかっ！！っていつか、訓練？」

「そうだ、訓練だ。」

「いきなり訓練なんて、そんなことひとつも聞いてないんですけど・

「。。。」

ウルフファングは魔獣としては下級モンスターで、訓練生のモンスター訓練によく使われている魔獣だ。

セリナも訓練生になる前に、何度か戦ったことはあるが、1匹倒すのがやっとというレベルだ。

「1匹だけですよね？戦うのは。。。」

セリナはおそろおそろ聞いてみた。

「そんなわけないだろ。俺がみたところ、この森には10匹くらいいるぜ？」

想定外の返答にセリナの血の気がサツとひいた。

「じゅっ。。。10匹ですかっ！？絶対無理です！！1匹倒すのがやっとです！！」

「来たぜ。」

セリナがあたりを見回してみると、ノエルが言ったとおり10匹のウルフファングが2人の周り取り囲んでいた。

「じゃあ、訓練開始！！」

「ちよっ。。。ちよつと待ってくださいよ！！」

ノエルはそう言うなり、木の上に一瞬で上り、安全地帯に移動した。

「ノエル先輩！ずるいです！！それより、無理ですよ！こんな大群一人でなんて。。。」

セリナがノエルに抗議しているうちに、ウルフファングが次々に襲ってきた。

「きゃあああああああ！！」

それから今に至る。

「もう少しで私、死ぬところだったんですからねっ！ー！ちょっと、聞いているんですか先輩！ー！」

「あー、もう、うるせえっ！ー！」

今度はノエルの怒号が響き渡った。そして一気にまくしたてる。

「ウルフフアング10匹ごときで、なにごちゃごちゃ言ってるんだ！？あんなもん、訓練生でもみんな10秒で倒せるっての！ー！」

1秒あたり1匹倒すなんて無理に決まってるだろっ！ー！セリナは心の中で毒吐いた。

「あんな雑魚で、あの程度じゃ、万年訓練生だな。」

ノエルのこの言葉が、セリナの心に深く突き刺さった。

「そ．．．そんな．．．。」

私ってそんなに弱かったの？訓練生候補生の中でも、けっこういい成績とってたんだけど．．．

やっぱり私まだまだなのかな．．．？

セリナが深く落ち込んでいると

「今日の訓練はこれで終わる。明日、俺が依頼を受けてるから、お前は俺のサポートをしる。今日は残りの時間で、必要なもの買いそろえるなり、ゆっくり休むなり、好きにしる。」

「はい。」

「俺は用事があるから、これから別行動な。夕方には戻ってくるから、ここで夕方の5時におちあおう。」

「はい、わかりました。」

ノエルと別れ、セリナは店を出た。その瞬間、どんつと衝撃を受け、尻もちをついた。

「いった・・・。」

衝撃を受けた方向をみると男の子が同じように尻もちをついていた。痛っ、いきなり出てくんなよ・・・。」

悪態をつきながら男の子はセリナを睨む。しかし、セリナを見た瞬間その目が大きく見開かれた。

「お姉ちゃん、もしかしてトレジャーハンター？その制服の色からして、下級クラスだと思うけど・・・。」

トレジャーハンターは制服の色でランクが分けられている。

トレジャーハンターのクラスは最上級のSクラス、上級クラスのA、Bクラス、中級クラスのC、Dクラス、下級クラスのE、Fクラスに分けられている。クラスが上にいくほど国から重要任務を任されるようになり、下にいくほど雑用を任される。

制服の色は、最上級のクラスは白、上級クラスは赤茶、中級クラスは緑、下級クラスは青となっている。

「うん、そうだよ。何、ちよつとその残念そうな顔は・・・、下級クラスだけど、すごく強いんだから。」

ノエルがいたら全力で否定することを口にした。

「えっ、お姉ちゃん強いの？」

「うん、強いよ。」

「じゃあ、僕のお母さんを助けるの手伝ってくれる？」

「お母さんを助ける？」

男の子は頷きながら続ける。

「お母さんは重い病気にかかって、その病気を治すには、この町の郊外にある森の中に生えている薬草が必要なんだけど、その森には、危険な魔物がたくさんいて、一般人は森に入れないんだ。」

「危険な魔獣って、魔獣の名前は？」

「タイガーファング」

「タイガーファングう！？」

タイガーファングとは、ウルフファングと系列は同じ魔獣だが、ウルフファングよりはるかに強い魔獣である。

「タイガーファングは、ちょっと・・・」

「えええ、お姉ちゃん強いんでしょ？助けてよ！！それにタイガーファングは夜行性だから今は安全なんだよ！」

「そっか、そういえば夜行性だったね。」

訓練生候補生として受けていた授業を思い出しながら言う。

タイガーファングは夜行性で、夜に行動する。日光が苦手で昼間は行動しない魔獣って習った気がする・・・

タイガーファングがいなかったら大丈夫だね・・・。それにこの子相当困ってるみたいだし・・・

「よしっ、お姉ちゃんと一緒に行ってあげる」

「本当！！やったあ！！」

そしてセリナは男の子と一緒に森に行くことになる。
そして森へ行ったことに後悔することとなる。

第三話 森へ行く前に

「でも、ちょっと待ってくれないかな？」

「えええー！？」

いざ行かんとしていた男の子はガクツと肩を落とした

「どうして？」

「私、見ての通りボロボロでしょ？だから、まず怪我を直さなきゃ
と思ってさ・・・」

「まあ、確かにすっごいボロボロだね、お姉ちゃん・・・」

セリナのボロボロの姿を見ながら男の子が言う

「怪我を直すのって、どのくらいかかるの？」

「・・・多分、30分くらいかな？」

「えっ、そんな短時間でこれだけの傷が治るの？」

「うん！あっ、そういえばまだ自己紹介してなかったね。私、セリナ。よろしくね！」

自己紹介をしていないことに気づいたセリナはあわてて自己紹介をする。

「俺、ロン！よろしく！じゃあ、お姉ちゃんの用事が済むまで俺も自分の用事を済ませてくるよ！」

「うん、わかった。じゃあ、30分後にここで集合ね。」

「うん、わかった！」

そう言っでロンは走って行った

さてと、まずテレポステーションを探さないと！

走って行ったロンを見送り、セリナはハンターハウスを探すため街を歩き始めた。

ハンターハウスとは、トレジャーハンターのための、トレジャーハンター専用の国家施設である。

ここでは、国からの任務や指令を受けたり、民間の人たちからの依頼を受けたりすることができる。

トレジャーハンターが仕事をするには必要不可欠な施設である。

仕事のほかにも、泊まることができたり、食事をすることもできたり、武器防具、旅に必要な必需品を買ったり、傷を治すことができたり、ハンターハウスに行くだけで、大抵のことはできてしまう。

しかもほぼ無料でサービスをつけることができる。

ハンターハウスは国の都市に設置されており、ハンターハウスに行くには、そのまま都市に設置されているハンターハウスに直接行くか、街に最低一か所設置されてあるテレポステーションに行き、必要な手順を踏めば、瞬時にハンターハウスにレポートすることができる。

テレポステーションは大抵町役場や市役所の近くに設置されているので、すぐに見つけることができる。

セリナたちがいた場所から役所は近かつたらしく、セリナはほんの数分で見つけることができた。

まず、入って手続きをする。

テレポステーションの床には、魔法陣が描かれており、そこに自分専用の魔法陣をかくためのペンで魔法陣に自分の国名、名前を書き足す。そして、トレジャーハンターであると認識された場合、自国のハウスにレポートすることができる。

セリナは手続きを済まし、トレジャーハンターと認識され、テレポ

ートが開始された。

初めてだから緊張するなあ

と思うのもつかの間、一瞬にしてハンターハウスに移動していた。

「ひ・・・広い・・・!」

セリナはハンターハウスにあまりの広さに声をあげた。

見上げると天井があんなに遠くに見え、建物の端の部分は全くもって見えない

何階まであるの・・・、てかどんだけ広いの!!

セリナは広さに衝撃を受けつつも、自分の怪我を治すため看護室を探す・・・が、

看護室ってどこにあるのーーーー!!

とりあえず、インフォメーションセンターで看護室の場所を聞くことにした

インフォメーションセンターはテレポートしたすぐそばにあるのですぐに見つけ、聞くことができた。

「あの、看護室ってどこですか?」

セリナは案内係の女性に声をかける。

「看護室ですか?看護室は、ここですぐ近くにありますよ。よかつたら案内しましょうか?」

「ぜひぜひお願いしますっ!」

「こちらです。」

そういつて、案内係の女性は歩き出した。

「あの、あなたってまだ訓練生ですよね？」

案内係の女性がセリナの制服を見るなり尋ねてきた。

「はい、そうですけど・・・」

「ここに来たのは初めてですか？」

「はい、そうです。ここって、すごい広いですね。想像以上でびっくりしました。」

セリナは辺りを見渡しながら言う

「監督官の人とは一緒じゃないの？」

「監督官は用事があるとかで、どこかに行ってしまいました。」

「そ・・・そうですか。初めてここに来る訓練生の方は、監督官と一緒に来るのが一般的なんですけど・・・。失礼ですが、監督官の名前は？」

と聞かれた瞬間、ノエルとの約束を思い出した。

セリナがカフェを出ようとした瞬間

「ちよつと待った、一つ言い忘れてたことがあった。」

とノエルに止められた。

「なんですか？」

「ハンターハウスに行こうか思ってるか？」

「はい、思ってます。怪我治したいですし・・・。それがどうかしましたか？」

自分のボロボロの体を見ながら言う。

「いいか、ハンターハウスに行くのはいいが、監督官の名前はばらすなよ。」

「ど、どうしてですか？」

いきなりすることに驚き理由を聞く

「どうしてもだ、絶対ばらすなよ！」

セリナはなぜばらしてはいけないのか不思議に思いながらも、ノエルに質問を投げかけた

「もし、ばらしたらどうなります・・・？」

「もしばらしたら、万年訓練生にしてやる。」

という恐ろしい返答が返ってきた。この人はやりかねないと思い

「絶対にばらしません。」

と心に強く誓いカフエを後にした。

という約束を思い出したセリナは

「監・・・看護室はまだですか？」

と質問を受け流した

「こちらです。」

おおきく看護室と書かれたある大きな病院といってもいいすぎではないほど大きな看護室があった。

セリナは案内してくれた人に礼を言い、看護室に入る。

「どうなされました？」

看護室に入り、受付の女性に声をかけられた。

「あの、訓練中に怪我をしてしまいました・・・。」

「わかりました。すぐ治療しますね。こちらへどうぞ」

受付の女性に案内されたのは、一人が入れるカプセルみたいな容器が横に倒されたくさん並んでいる部屋だった。

「その容器に入ってください。容器に入ったらすぐに治療が始まります。」

「わかりました。」

セリナはおそろおそろ容器に入り、寝転んだ。すると扉が閉まりふたをされた。

その瞬間薄い緑色の液体が流れ込んできた。

「きゃあ、なにこれ!？」

意味が分からず、受付の女性を見る。

「大丈夫ですよ。これは特殊な液体で、液体のなかでも呼吸できま
すし、服をぬらすこともありません。すぐ治りますから、そのまま
横になってお待ちください。」

そう言うなり、受付の女性は元の受付に戻って行ってしまった。

するとたちまち、容器は液体に満たされた。

本当に大丈夫なのかな？

セリナはおそろおそろ液体に中で息をしてみる。

「全然普通に息ができる!! しかもしゃべれる!! しかもなんだか
気持ちいい!」

いろんなことに感動しながら、だんだん眠気に襲われてくる。

なんだか・・・眠たく・・・なってきたな・・・

そしてセリナは眠りに落ちた。

「セリナさん、もう終わりましたよ。」

自分と呼ぶ声に反応し、目をゆっくり開ける。

「お疲れ様でした。怪我のほうは完治されましたか？」

「怪我・・・? あっ、私いつのまにか寝ちゃったんだ!」

すぐさま自分の包帯をとる

「な・・・治ってる！」

全身の包帯をとつても、すべてきれいに完治している。

「そうですか、では、気を付けてくださいね。」

怪我が完治したことに感動しながら看護室を出る。そして、ロイとの約束を思い出した。

「あつ、ヤバイ！時間大丈夫かな・・・？」

時計を見てみると、ロイと別れてから25分が経っていた

「ぎりぎり大丈夫・・・かな？早く帰らないと！」

「あつ、お姉ちゃんすっかり怪我治ったね！」

先に待ち合わせの場所に来ていたロンがセリナに気づき、声をかける

「うん、ばつちりだよ！それじゃ暗くならないうちに行こうか」

何とか待ち合わせの時間に間に合い、ロンもう大丈夫だとアピール。

そして、二人はようやく森へ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2518u/>

トレジャーハンター

2011年10月9日07時34分発行